

正字通云、今西洋國千里鏡磨玻璃所成者、以長筒窺之、見數千里、復制小者于扇角、近視者能使之遠、山泉遠望の地に遊に携之ば甚興有、舶來花夷の制、此土にて制する物品類美惡あり撰べし、長房が縮地の術をからず、誠に巧なる具なり、千里鏡先より覗ば近もの遠くみゆる、正字通の説ごとく、別に造らざれども兩用あり、すべて紅毛の制せるもの可なり、

〔西遊記 續篇 五〕奇器

細工の微妙なる事は、世界の内阿蘭陀に勝る國なし、○中虫目鏡のいたりて細微なるは、わづか一滴の水を針の先に付て見るに、清淨水の中に種々異形異類の虫ありて、いまだ世界に見ざる處の生類遊行したり、又潮を見れば六角成物の集りたるなり、油は丸きもの、あつまりたるなり、水は三角なるもの、集りたるなり、其外酒酢などには、色々夥敷虫あり、○中又望遠鏡とて、日月星辰迄力の届く遠目鏡ありて、日月の眞象を見分ち、星も太白星をみれば、月の如く盈虧あり、木星をみれば三ツ引の紋の如く横に帶あり、土星をみれば斜に輪まとひて、星の形長くみゆ、其外銀河の白き所をみれば、小き星夥敷聚りたるにて、其小星よくわかりて數へつべし、近き頃泉州の人岩橋善兵衛此望遠鏡を作り出して、阿蘭陀渡りの望遠鏡よりもよくみゆ、余が家にも所持す、又隣目鏡とて高塚を打越して隣をみる目鏡あり、又暗夜に遠方をみる目鏡あり、猶この外にも種々の奇器、人の耳目をおどろかすもの、年々にわたり來れり、

〔嬉遊笑覽十二〕禽蟲虫めがね、洛陽集虫めがね、老の波こす螢かな、嘉辰むさし野はむさしのなりけり、虫めがね行正續山井よりてこそそれ蚊ともみめ虫目がね、種寛水底の月やもにすむ虫めがね、安信西洋鏡の顯微鏡は高價なるをこゝに學び作れるには、小兒の翫具もあり、

〔嚴有院殿御實紀附錄上〕御承統のはじめ天守に上り玉ひしに、御側のものら遠眼鏡を持來り、御覽あるべしと、三度まで申上しに、聞せたまはぬ御さまにては、てに仰られしは、われ幼しいへ